虚弱化しても、認知症になっても、障害者もみんな通える場にしましょう

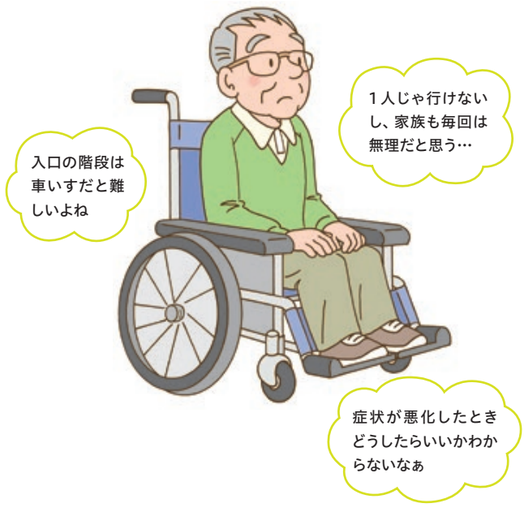
専門職がサポートすること、自分たちでやったほうが楽しいことの区分けが必要です。

まずは通って来るのに困難なことを明確化

その場のリーダーやメンバーにただ受け入れを促すだけでは、一緒に継続して活動することは困難です。

まずは、その場のメンバーが認知症の人や障害のある人にとって困難なことを明確にすることで、メンバーだけではできないことがはっきり見えてくるはずです。

車いすの人だったら？



メンバーと専門職でできることの役割分担を

場のバリアフリー化、認知症の人や障害のある人の介助、緊急時の対応など、対応が必要な点をまずメンバーで共有します。その上で、メンバーで手伝えることと、専門機関につなげる必要があることをみんなで話し合いながら確認し、専門職が外との連携をつくります。

こうすることで、互助力が育ち、チームワークの絆が育ちます。

助けてもらうことはたくさん。
でもできることを仲間が引き出してくれて自信に変えてくれる。
そんな場所は少ない！

もっと もっと 地域に小さなタネをまこう！

「通い続けられる場」にするためには、地域に存在を知ってもらうことも大切。

地域とのつながりが生まれ、通いの場が地域を安全で温かい場に盛り立てることにもつながります。

こんなことも地域への小さなタネまき

いつものウォーキング

みんなでウォーキングがいつもの活動。場のリーダーは、ウォーキング中に道端のゴミが気になる。

ウォーキングをしながらゴミ拾い

リーダーの発案で、みんなでおそろいのヤッケを着て、いつものウォーキングのついでにゴミ拾いを開始。

子どもたちからのあいさつと感謝

ゴミ拾いを始めて数日後、あるとき、下校中の子どもたちからの「ありがとう」が。活動メンバーの中に、地域とのつながり、地域貢献への喜びが生まれ、活動へのモチベーションに。

地域とつながり地域も活性化

活動は徐々に大きく広がり、地域とのつながりや、助け合いのきっかけを生む。